
雷氷の悪魔祓い

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雷氷の悪魔被い

【Nコード】

N7417Z

【作者名】

ハル

【あらすじ】

非日常を望んでいた高校一年生の高橋雷斗は、夜中に謎の女の子の氷華に出会い、悪魔と契約させられてしまう。氷華に振り回されながらも、悪魔被いと青春の学生生活の両立を目指して頑張る話です。予定ではファンタジーと学園の複合型のようなものを目指します。最後に、文章が下手くそで読みにくいかもしれませんが、ご了承ください。R15は保険ですので、基本的にはないと思います。タグの最後3つはまだ出てません。

運命の出会い

「やっぱり、こういう非日常って憧れるよなあ」
ベッドに寝転がりながら、漫画を読み進める。

「って、勉強の休憩で漫画読み始めたら、もう5冊も読み返してしまった。明日の小テストどうしようかなあ……、まっいつか」

ハッと気づくがもう遅い。

もうそろそろいつもなら寝る時間なので、寝てしまおう。
と思い、ベッドに入ろうとした時だった……。

ドーン

「な、何だ!？」

大きな音に驚いて、辺りを見渡してみるも、何も無い。

「かなりデカイ爆発音みたいなのが聞こえた気がしたんだけどなあ」
少し気になりながらも、眠ることにした。

ドゴーン

「やっぱり、何かある……よな」

二回も音を聞いたので、聞き間違いではないと確信する。

とりあえず外をしてみるか。

と思い、窓から外の様子を確認する。

「喧嘩…にしちややりすぎだよな」

家の前は公園になっているが、その公園で女の子と男が刀を持って喧嘩していた。

「警察に通報…いや、止めに行つた方がいいかな」

念のために金属バットを持って行く。

夜の0時を回っていたので、家族は寝ていて、すんなり脱走でした。

「おい、何してるんだ」

女の子と男が俺の声に反応して、俺の方を見る。

「えっ、もしかして見えてるって言うの？」

女の子は癖のない肩まで伸びた茶色の髪に、大きく開いた翡翠色の目、さらにそれらを引き立てるかなり整った容姿が特徴的だった。ただ…胸がないのが残念だ。

女の子は俺のことを見るなり、驚愕の表情になる。

それとは逆に男は口元を吊り上げて、不気味な笑みを浮かべる。

「あぶない、逃げて！」

女の子の声に反応するが、男は一瞬で俺の目の前まで詰めていた。

「なっ!？」

分かった時にはもう遅い。

殺される

そう思い、無意識に眼を閉じる。

自分に何かがかかると感じる。

だが、自分の体に痛みは全くない。

恐る恐る眼を開き、何が起こったのかを理解する。

女の子が俺を庇って斬られたのだ。

「な、んで？」

「勝手に…体が動いちゃ…ったのよ。それ…より、逃…げて」

所々途切れながらも、女の子は確実に伝える。

「バカヤロー、俺の代わりにやられた女の子を見捨てて逃げられるかよ」

「な…によ、それ。でも…、いいわ。…あ…んたが…戦い…なさい」

「分かった。でも、どうすればいい？」

女の子がニヤツと軽く笑うが、そんなのは気にならない。目の前で女の子が死に掛けているんだから。

「フェル…時間…かせいで」

『わかった』

女の子が持っていた刀が輝き、光の粒子が集まって、犬のような姿になる。
散々驚きすぎて感覚が麻痺しているのか、俺はほとんど驚かなくなっていた。

フェルと呼ばれた犬はまっすぐ男に向かっていき、その周囲の温度が下がる。

男はフェルを殺そうと斬りかかるが、全て紙一重でかわされる。

「じゃあ、…今から…召喚の…儀式を…するわ」

「召喚？ いったい何を召喚するんだ？」

「悪魔よ」

その言葉を聞き、俺は言葉が出なかった。

宗教とかそんなものだろうと思っただが、この女の子が死に掛けの状態で冗談が言えるほど、愉快的性格をしているようにも見えないのだ。

「そんなもの…どこから召喚するんだ？」

「…こことは別の悪魔の世界。なら、さっさと始めるわよ」

女の子の声が突然途切れ途切れから、ハッキリしたものになる。

そこに多少の違和感を感じたが、今の状況ではどうでもいいことだろう。実際に目の前の女の子は血だらけなのだから。

「分かった」

自分で思うが、どうしてこうなったのだろう。

自分が非日常を望んだからだろうか。

そうであったなら取り消したい。

面倒なことに巻き込まれて死ぬのは嫌だ。

でも、自分を庇って傷ついたこの子を今守れるだけの力は欲しい。

『我、世界を繋ぐ者。汝、我が呼びかけに答え、世界を渡れ』

女の子の目の前に光の粒子が現れ、一つに収束していく。

俺と女の子の目の前に現れたのは白い猫だった。

『俺を呼んだのは、お前か？』

「はい。でも、契約するのはコッチです」

女の子が俺を指差し、猫も俺の方を見る。

『何のために力を望む』

「…今、護れるだけの力が欲しい」

俺がそう言うと、猫は軽く笑う。

『面白そうな奴だ。暇つぶしに契約してやる。右手を出せ』

恐る恐るながらも、言われた通りに右手を出す。

「おわっ！」

猫が再び光の粒子になり、それが右手の中指に収束し、光が収まればそこには金色の指輪がはまっていた。

「な、何で指輪が」

『これで契約は完了した。じゃあ、また変化するからな』

「えっ!？」

聞き返した時にはすでに遅く、指輪がまた光り、細長い形になり、それを掴むと刀身が銀色の美しい刀になっていた。

「もうツツコミはやめるから聞くけど、次はどうしたらいいの？」

『俺は悪魔だからな。人間の感情、想いを食って力にする。お前の怒りや、恐怖と言った感情、誰かを護りたいといった強い想いを込めてみる。そしたら自ずと反応する』

言われた通りに、想いを込める。

自分を護って傷ついた女の子を護りたいと思う強い想いを。

バチバチ

刀身に雷が走る。

「うおっ!」

突然のことだったので、声を上げて驚いてしまう。

『小さな動作は俺がアシストしてやるから、叩きつぶしていい』

「分かった」

フェルと男が戦っているところまで一気に駆けていく。

「フェル、戻って！」

『了解』

女の子が右手を突き出すと、少し距離があったが、フェルが粒子になり、女の子の指に銀色の指輪として収まる。

「おーりゃあ」

剣道とかの心得はないので、刀を振っても完全な我流だ。
我流ゆえに相手にかわされてしまう。

『想いを込めて、『雷閃』って叫べ』

「くっそっ、『雷閃』」

横に振った刀はまたしても男に当たることはない。

だが、先ほどとは違う結果があった。

刀の軌道上から雷の斬撃が飛び出し、男は持っていた刀で防御しようとするが、その防御を通り抜けて、その胴体を真っ二つにしてしまう。

「お、俺、人、殺しちゃった」
予想外の結果に慌ててしまう。

男は俺を殺そうとしてた。

殺さなかったら殺されてたかもしれない。

でも、殺すことを前提にした攻撃をするのと、殺さないと思って攻撃して結果殺したのでは、精神的にずいぶん違う。

「やったのね」

女の子が俺の方へ駆け寄ってくる。

だが、さっきと少し違う。

「あつ、怪我が無くなってる」

「ああ、それならもう治療したから大丈夫」

いったい何のために戦っていたのだろう。

「じゃあ、怪我もないなら、俺はもう帰るから」

じゃあ、と言って立ち去ろうとする。

「ちょっと待った！」

「な、何？」

嫌な予感がしたので、恐る恐る聞いてみると、やはり嫌な予感の中していた。

「あんだ、あたしのパートナーにならない？」

「はあ!?!」

俺の意識はそこで途切れてしまうのだった。

最後に思ったことは、何だ夢か。だ。

だが、今日と言う日がこれからの運命を変えてしまったことには、まだこのときは知る由もなかった。

運命の出会い（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

転校生

「やっぱり夢か」

俺はベッドから起きると共に、大きく伸びをすると、思いがけない声がかげられる。

『やっと起きたか。そういや自己紹介がまだだったな。俺はペンケレ。お前は？』

「じゃあ長いからペケな。俺は高橋雷斗。たかはしらいとってか、何でいんの？」

ペケは一瞬呆れ顔になりながらも続ける。

『まあ好きに呼べばいい。俺はライトって呼ぶからな。何で居るかって、そりゃ、契約したからに決まってるだろ』

「やっぱり夢じゃなかったんだな」

『まあ、俺がここにいるのが証明だしな』

何か目の前にいる猫に偉そうにされると、イラッとくるなあ。

「何で指輪じゃないんだ？」

『戦う時はイメージ通りの武器になるし、人が多いところでは指輪、人がいなかったら、この姿になるからよろしくな』

「何か…悪魔って自由だな」

ペケは、何も分かってないのかとも言いたげな目で俺を見てくる。

俺は悪魔じゃないんだから、知る由もないだろうに。

『いいか、悪魔つてのは我慢することがない。言わば、欲に忠実に生きてるんだ。何故自由なのかって聞くのは、太陽つて何故東から昇るのかぐらい常識だぞ』

「ああ、それは…悪かった」

『分かればいいんだよ。それより腹減ったから、何かくれよ』

「俺も腹減ったけど、キャットフードとか無えしなあ。ペケは好きな食べ物とかあるのか？」

ペケは考えるような仕草をしてから、思いついたように答える。

『ウインナー。あと俺は猫じゃない、虎だ』

「おいペケ、魚と思わせての、猫がウインナーつてのは百歩譲って良しとしよう。だが、虎と言うには無理があるぞ」

『俺はホワイトタイガーがモデルだ！デカいと不便だから、小さくしたんだよ』

俺は信じられないと言いたげな視線をペケに送り続ける。

『もういい。とりあえずウインナーくれよ』

「分かったから、機嫌直せよ」

『ふん』

『ここが学校か』

ペケは指輪になっているので、頭の中に直接語りかけてくる。

「猫になったらペケは追い出されるから、絶対そのままにいるよ」

『うむ、あえてやってみたい気がするぞ』

「絶対、猫になんないよ」

『それは振りか？』

「ちげえーよ！」

一人で喋ってるからか、廊下を歩いてる他の生徒から避けられていた。

「お前のせいだからな。今日はウイナー抜きだな」

『それは勘弁してくれ！』

ペケの必死の願いに、つい許してしまった。

「では、突然だが今日は転校生の紹介をする」

ふーん、転校生とか関係ないな。

どうせ、喋る気ないし。

挨拶もスルーだな。

「高橋氷華です。そこにいる、雷斗の従兄妹です。よろしくお願
いします」

ガタン

「おーい、高橋大丈夫か？」

あまりの不意打ちに驚きすぎて、椅子から転けてしまった。

こんなの、今時じゃ『新婚さんいらっしやい』でしか見れないぞ。

「あつ、はい。大丈夫です」

言いながら、氷華と名乗った女の子を見ると、全てを思い出す。

あつ、記憶喪失設定とかなかったからね？

昨日、公園で会って、俺を非日常に連れ込んだ張本人だった。

「雷斗、昨日はありがとね。いろいろと」

含みある笑顔で言う氷華から、一瞬で俺にクラス中の視線が刺さる。
主に男子は、このままじゃ視線だけでなく、別の金属体で刺されそ

うな気もする。

「転校生のあの子と、どういう関係か、嘘偽りなく正直に答える。場合によっては…分かってるな？」

話しかけてきたのは、後ろの席の重吾だ。席が前後なので仲良くなつた。

「別に、どんな関係でもない」

はずだ。俺の記憶の中では、何もなかった。

「雷斗はそんなこと言うんだ。あたし達、一生共に寄り添う仲じゃない。昨日の夜は遊びだったの!？」

女子がコソコソと話し始め、男子はよく分からない言葉を叫んでから、視線だけで人が殺せそうなくらい睨んでくる。

「なっ!？俺はそんなこと知らねえぞ」

「知らないって……、あの子はどうなるって言うの?まだあんなに小さいのに……」

クラスからの視線が先ほどよりも厳しくなる。

今の心境だけで自殺ものだな。

「冗談よ」

軽く笑いながら氷華は言うが、俺の中では冗談のレベルを越えていた。

できれば二度と関わりたくない。

「でも、従兄妹ってのは本当。下宿先の家に行ってみたら、あんたの家だったから焦ったわ」

そう言う氷華は全くそんな表情ではない。

おそらくは、俺の家に住むってのは本当だろう。

「あんの糞親が」

こんな存在自体が悪魔みたいな奴が住むのわ承認したとは許すまじ。

「まあまあ、良い両親じゃない」

そう言うって氷華が座るのは、俺の斜め後ろで重吾の隣だった。

そして、何も言わなくても分かってしまった。

氷華がいる日常は、それだけで全て非日常に変わってしまうと言っことに。

転校生（後書き）

今日、もう一話投稿予定です。

予定では20時ぐらいに

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

悪魔のこと

いろいろあったが、今日も学校が終わったので、とりあえず家に帰る。

自分の部屋に入って、ひとつの異変に気づく。

「どういつつもりだ？」

「何が？」

氷華を問いたただすが、氷華は何のことか分からないといった表情で返す。

「だ・か・ら、何で俺ん家なんだって言ってんだよ」

「従兄妹だから。他に理由があるとすれば、あんたがあたしのパートナーになるから」

「俺は従兄妹がいたなんて初耳だ。あと、パートナーは嫌だ。」

「まあいろいろ事情のある家庭だからねえ。あと、パートナーは申請しといたから、拒否できないわ」

そういつて氷華は一枚の紙を見せてくる。

コピーみたいだが、発行元は聞いたことない名前の協会なのだ。

「……協会ってことはシスターさん？」

「あたしはシスターじゃなくて悪魔被い、つまりエクソシストの類よ」

「ああ、協会だから悪魔被いね、納得」

「人事みたいに言ってるけど、あんたも悪魔と契約したんだから、所属することが強制的に決まってるんだから」

お前が召喚して、契約させたんだらうと言えよ、うるさそうなので黙っておく。

「…ちなみに拒否すれば？」

「『墮天』ってことで殺されるわね」

今、かなり恐ろしいこと言ってるんですけど……。

「天使じゃないのに、『墮天』って何故に？」

よく分からないツッコミをしてる俺も俺だな。

「『墮天』ってことは悪魔に堕ちたってことらしいから、いいんじゃない？」

「まっ、いいか」

そんなことはどうでもいい。それが共通語なら、俺だけ別の呼び方で呼んでも不便なだけだ。

「昨日の…あの人は？」

「あれも墮天。感情を全て悪魔に喰べられてる」

「感情を喰べられる…って何だ？」

氷華が大きくため息をつく。

説明がめんどろなだろうか。

「悪魔は人の感情や想いなんかを喰べるの。人間は悪魔に餌を与え
る代わりに、悪魔の力を借りてる。でも、悪魔が感情を全て喰べ尽
せば、その人間の肉体を手に入れることができる。悪魔は召喚しな
いと来れないから、体に乗っ取らないと自由に行動できないの。で、
悪魔の力にもよるけど、実態化して自分で行動できる時間はだいた
い10分程度なの」

「ここまでいい？と聞いてくるが、理解できても納得はできない…
…。
非日常すぎて、俺じゃついていけそうにないです。」

「でも、ペケは人がいなかったら10分以上も猫の形態だぞ」

『俺は特別だからな』

ペケが何か言っているが、無視しておこう。

あとでウインナーでもあげれば機嫌はよくなると思うし。

「たぶん、その猫の姿も一つの形態だと思うわ。あたしのフェルも
元はもつと大きいけど、大きくて邪魔だから小さい形態になっ
てるし」

「ペケもデカくなれるのか？」

『なれるけど、疲れるらしいから嫌だ。この方が楽だ』

悪魔ってのはどこまでも自由だな、おい。

「まあ、いいや。でも、ペケはなんで小さくなれるんだ？」

『ん？俺はただ俺が小さい時の体になってるだけだから、特に理由はない』

「普通の悪魔は産まれた時から、ほとんど成体と変わらないんだけどね。体が成長する悪魔は、上位種で、ほとんど力に慣らしていないと体が耐えられないらしいわ。だから、ペケちゃんもフェルも上位種ってこと」

勝ち誇ったかのような顔で氷華が言ってるので、こっちはスルーしておこう。

「へえ〜ペケって凄かったんだな」

『ずっとそう言ってただろ』

「比較対照がなかったから、凄いのか分からなかったんだよ」

ペケと言い合っていると、氷華が身を乗り出してくる。

「で、あなたはあたしのパートナーになって、一緒に悪魔被いをするの、組まないで殺されるとどっちがいいの？」

究極の選択だな。

「……ああ、もう分かったよ！やりやいいんだろやりや」

「分かればいいのよ」

「でも、何でお前は今までパートナーがいなかったんだ？」

「……人数の関係上……仕方なかったのよ」

ああ、人数が奇数だったからパートナーを作るに作れなかったのか。何か可愛そうだな……。

友達いるのか気になるが、地雷踏みそうなのでやめておこう。

「まあ、やるのもう決まったからいいとして、街中で戦って見られたらヤバイんじゃないのか？」

「そのへんは大丈夫よ。悪魔を武器形態にしてる時は、自分に悪魔の力が流れてくる。つまり一般人には見えてないから」

「俺は見えたけど、それは何でなんだ？」

氷華は考えこむような仕草をするが、正直キャラ的に似合っていない。

「見えるあんたが異常なの。たぶん、特別な力があるか、運命ね」

氷華と出会う運命だと思つと嫌だなあ。

可愛いけど貧乳だし、状況が俺には荷が重過ぎる。

「何か失礼なこと考えてない？」

「いえ、何も。気のせいではないでしょうか」

「そこまで否定するところが怪しいけど、まあいいわ。とりあえずあんたを鍛えないとね」

鍛えるって何するんだろうか。できれば、楽そうなのでお願いしたい。

「何するんだ？」

「強くなるには、やっぱり、実践が一番」

ていうことで、と氷華が続け、

「しばらくあたしは見てるから、あんたが墮天を倒しなさい」

嫌だ、そんなの、めんどくさい。

と言おうとすると、氷華が何かを感じたのか、勢いよく右を見る。

「ここから4時の方向に距離は500m。急いで用意しなさい」

用意するものはなかったの、とりあえずペケを指輪にして準備完了。

「行くわよ」

はあ、めんどくさい。

でも、引き受けたししゃあねえか。

悪魔のこと（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

墮天との戦い方

氷華に付いて行き、けっこう大きな河川敷に付いた。

夕方なので子供などはいなく、近くを学生や、ペットの散歩をさせてる人がちらほらいる。

「普通の人に見えるんだが」

「見た目はね。でも中身は悪魔に乗っ取られてる」

俺が言うと、氷華はこちらを見ずに答える。

「悪魔につて、そんなに簡単に乗っ取られるものなのか？」

「悪魔は心の際に入り込んできて浸食していくの。あたし達みたいに自分から契約する人もいるけど、大きなショックを受けた時は悪魔に乗っ取られやすいわね」

大きなショックとは、失恋、人間関係などいろいろあるだろう。

「悪魔に種類はあるのか？」

「たしかにあるにはあるわよ。契約するような悪魔には、それぞれの属性や能力があるわ。人に乗っ取るようなのは、憤怒、嫉妬、強欲、色欲、暴食、怠惰、怠慢のそれぞれ七大罪の王がいて、その眷属かフリーかね」

「七大罪ってどうやって分けるんだ？」

「憤怒の王は人の憤怒の感情しか喰べないし、嫉妬の王は嫉妬の感情しか喰わないの」

へえ〜つと感心したような声をあげて、俺は気になったことを聞いてみた。

「他の悪魔は全ての感情を喰うのに、王は一部なら、王って悪いけど、そこまで悪くまいんじゃない」

「でも、王は足りない分は他の人間を襲って喰べるから、被害者が多いのよ。普通の悪魔による被害者を1人とすれば、王クラスだと1000つてところかしら」

「王さんまじパネエっす」

驚いている俺に、氷華はため息をついて話し始める。

「あんたのペケちゃんも実力的には王クラス。で、ペケちゃんはあんたから喰べる感情や想いの量は、極力抑えて普段と変わらないくらいしか取ってないの。その分ペケちゃんはどこからエネルギー補充してると思うっ？」

本気で分からないので、悩んでいると、氷華はまたため息をついて続ける。

「他の悪魔を倒した時に、相手から奪ったり、人間と同じように食べ物で摂取してるの。だから、あんたはペケちゃんに感謝しなさいよね」

もともとお前が契約させなきゃ、こうならなかった、と思うが言っ

たら面倒そうなので黙っておく。

てか、ペケのウイナーの暴食ってそんな意味があったのか。

「これからはもっとウイナーやるようにするよ」

「それでいいのよ」

氷華は勝ち誇ってるのか、少し喜んでいる。

「てか、思ったがあの墮天って、人を襲ってないが、それでも殺すのか？」

「今は襲ってないけど、しばらくしたら襲っわ。感情がもの凄いスピードで喰べられてる。あのままじゃ、もうじき乗っ取られて、殺すしかなくなるわ」

「ってことは、今なら助かるのか？」

「もう手遅れよ。目の前で浸食が始まらないと、心のどこかしらに障害が残るわ」

悲しそうに言う氷華は、昔にそれで助けられなかったかのような、表情をするので、何も言えなかった。

「…今こんなこと聞くのもって思うけど、今にしか聞けそうにないから聞くけど、墮天を助けるにはどうすればいいんだ？」

「攻撃すればいいわ」

「えっ？でも、それじゃあ傷つけちゃうんじゃない？」

「あんたバカ？悪魔に完全に乗っ取られてなかったら、まだ悪魔は人間の体ってわけじゃない。ペケちゃんとかフェルの武器は悪魔にしか効かないの」

「それって……人間にやったらどうなるんだ？」

「悪魔の武器を使う時は、自分も悪魔と一体化してるから悪魔に攻撃できる。一体化したら、建造物や人間には触れない。つまり、攻撃もすり抜ける。だから、完全に乗っ取られてなかったら、悪魔だけを攻撃したことになるの」

分かった？と氷華は続けてくる。

正直な話、話が長いです。途中から聞く気が半分失せましたよ。

「まあ、何とか」

返事を濁らせて、この場は保留しておく。

「じゃあ、行くわよ。助けるにも、殺すにも、攻撃しなきゃいけないんだから」

氷華が飛び出していく。

「フェル」

『行くよ』

氷華の指輪が光り、氷華の手に形を持って収束していく。

現れたのは白い大鎌だった。

俺も本物は一度も見たことはないが、見ただけで分かるのは、それが大鎌だと言うこと。

「今回はあたしが手本を見せてあげる」

相手の墮天はロングソードを持って応戦する。

氷華は墮天の攻撃を全て、無駄の無い動きで余裕を持ってかわす。

素人から見ても氷華が強いのはすぐに分かる。それほど圧倒的だった。

「まず大事なのは、どんな攻撃でも反応できること。そして、相手の次の攻撃を予測すること。まあ、これは経験でどうとでもなるわ」

墮天が悔しさを分かりやすく表情に表して、距離をとる。

ロングソードが光りを帯びて、墮天はその場でロングソードを振り回す。

目には見えない何かが、飛んでるのだろうことは、俺でも分かった。

「氷柱」

氷華が呟きながら大鎌を左から右に振る。

その瞬間に氷華より少し前の方で、直径2mほどの氷柱が何本も現れて、見えない攻撃を防ぐ。

またしても墮天は悔しそうな表情をして、何度も衝撃波か鎌鼬か分からない技を繰り返す。

「その次に大事なものは、耐えて一瞬の隙を見逃さないこと。弱い悪魔は子供みたいなもの。負けず嫌いで、防がれたら何度も同じ技を使ってきて、耐えた分だけ隙も生まれやすい。まあ上位の悪魔にもなると話は別だけどね」

そう言っつて氷華は氷柱を何重にも重ねて、防御姿勢をとっている。

墮天は一撃に全てを込めようとしたのが、大きく振りかぶり、隙が生じる。

「コッ」

「氷狼」

氷華が大鎌を振ると、大型犬よりも二回りほど大きい、氷の狼を作り出す。

狼が一気に駆けて行き、墮天の頭に勢いよく噛みついた。

氷狼の一撃で首の無い墮天は力無く倒れ、光になって消えていく。

「すげえ」

戦いに見入ってしまったって、無意識に呟いていた。

「まあ、こんな感じだから、あんたも頑張りなさいね」

「できるわけないだろうが！」

突然叫びだしたので、氷華は一瞬ビクッとしてしまう。

「あたしが特訓してあげるじゃない」

「優しくお願いします」

いきなり本気でやりそうなので、心からお願いする。

「うんうん」

氷華は俺の態度に喜んでいるが、納得はしないだろう。

氷華こいっという時間はまだ短いけど、気付いたことがある。
氷華こいっという退屈しない人生を過ごせるだろう。

墮天との戦い方（後書き）

なんかお気に入り数とか増えてたんで、更新します！

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

自宅にて

「氷華、お前は何故この家にいるんだ？」

俺が家に帰ると、そこには氷華がいた。

「ここにしばらく住むんだから、ここがあたしの家になるのよ」

「それは理解してはいるが、納得してないぞ」

我が家の食卓に普通に氷華がいたのだ、驚くなど言う方が無理な話である。

「雷斗、父さんはな、父さんはな、可愛い娘がもう1人できたかと思うと、嬉しいんだ。それなのに、お前ときたら、氷華ちゃんに向かって何て口の聞き方だ」

「おい、親父、少し黙ってる。剥ぐぞ」

親父が自分の体を腕で隠す。

そんな女の子っぽい仕草をしてもキモイだけだと何故気づかん。

「剥ぐって何をだ？父さんが雷斗に……キモツ」

「おめえの妄想の方がきめえよ。剥ぐつてのは、皮膚のことだよ」

「父さんはな、父さんはな、お前をそんな猟奇的に育てた覚えはないぞ」

「うん、まとも育てられた覚えがねえからな」

そう、俺の家には少し複雑な事情があったり、なかったりするのだ。

「わ、わたしはお兄ちゃんになら、いいよ」

我が妹が顔を赤くしながら何か言っているが、聞いてはいけない気がするので、完全スルーモード展開中だ。

「で、氷華、お前はどこで寝るんだ？」

「あなたの部屋の押入れで、某猫型ロボットみたいに寝るわよ」

「それなら氷華ちゃん、母さんの部屋を使えばいいじゃ」

この親父は何を言い出すのだ。母さんは10年前に死んだ。だが、それから掃除はするものの、ずっとそのままにしておいた母さんの部屋なのに。

「雷斗、お前の言いたいことは分かってる。でもな、いつまでも過去に囚われてるわけにもいかない。雷斗には悪いが分かってくれ」

「それくらい…分かってるよ」

「んじゃ、氷華、飯食ったら母さんの部屋に案内するけど、荷物とかはどうしてるんだ？」

「あなたの部屋」

ああ、ちゃんと持ってきてたんだな。なら安心。できるわけがない。あそこには俺のコレクションが……。

「ああ、そうか。……って、ええ！？俺の部屋に入ったのか」

「30分ぐらいだけどね」

「なげえよ」

氷華ならやりかねそうで怖い。

「それで、何か見つけたりしなかったか？」

「えっ？うーん、本棚の工口本を隠すために二重にして奥に隠してたり、PCでいかにも普通そうなフォルダ名に大量のアダルトな画像が入ってたり、ジャズのCDかと思わせて中身はAVだったり、なんてのは見つけてないから安心して」

「もうやめてくれー！。心の傷を抉らないでくれ。ほら、雫の教育に悪いだろ？」

「ふーん、お兄ちゃん、わたしと言うものがありながら、そんなもの見てたんだあ」

雫の目が笑ってない。殺されそうで怖いぞ、その目は。

「実の妹にそんなもの見られたら自殺ものだからな。俺はそんなものは持ってない！」

「お兄ちゃん、わたし達は義理の兄妹なんだから、お兄ちゃんがそ

んなこと気にしなくても結婚できるよ」

「義理でも何でも、ずっと一緒に住んでたんだから、家族なのには変わらないだろっ!」

俺のセリフに親父は目を潤ませながら、見てくる。何か鳥肌立つからやめてほしいんだけどな。

「父さんはな、父さんはな、雷斗、お前にそんなふうにして貰えて嬉しいぞ」

「あー、分かったから。とりあえず黙って、泣き止め、キモイから」

「分かってる。これが世に言うツンデレってやつなんだな」

「親父にデレた覚えはねえし、俺はツンデレじゃねえ」

親父は最近、中途半端にネットの言葉を覚えて、無駄に使いたがるから、扱いが日々めんどろな方に進化していく。

「お兄ちゃん、わたしにそんなこと言うんだあ」

雫は何故持つてるのか分からなくが、ポケットから裁ちバサミを取り出してチラつかせている。

「えーっと、雫さん?その物騒な物はしまってくださいとありがたいんですけど……」

雫は満面の笑みを浮かべる。

「お兄ちゃんの状態次第かな」

「雫さんまじパネエっす。その可愛さにいつも魅了されております」

「仕方ないから許してあげる」

俺は内心ホッと胸を撫で下ろす。

「あつ、でもお兄ちゃん、お兄ちゃんの隣の席のあの女とはあんまり喋らないでね。今日の休み時間ので、10回もお兄ちゃんの声聞いてるなんて、あの女生意気。しかも席替えしてから4ヶ月と18日経つけど、お兄ちゃんと173回も会話してるなんて許せないよね、お兄ちゃん」

「ど、どうして雫は…そんなこと把握してるんだ？」

俺の顔が真っ青になる。触れてはいけないものに触れてしまったかのように。

「やだなあ、お兄ちゃん。兄のことを知るのには妹として当然じゃない。会話もゼーんぶ聞かせてもらってるんだから」

そう、我が妹の雫は、若干ヤンデレが入っているのだ。

それにしても、どうやって聞いているんだろうか。

俺は2年のクラスで、雫は1年のクラスだからフロアが違うから聞きようがないと思うんだが……。

まさか、あいつまたやりやがったのか……制服のクリーニング前は

俺の制服を持っていくと思ったら、このためか。零のやつ、俺の制服に盗聴器しかけやったな。

昔、それでクリーニング店から電話があったから徹底させてきたのか。

それからいろいろあったが、無事に夕食を食べ終える。

夕食後に約束通り氷華が俺の部屋にくる。

「あんたの妹って……怖いわね」

「……そうでもないぞ」

一瞬の間があったが、そう答えておかないと怖いのだ。

そして、近くにあった紙に、文字を書いてみせる。

俺の制服に盗聴器がしかけられてる。この会話も聞かれてるかもしれない。

瞬間、氷華の表情が青ざめる。

「そ、そうなんだ。そういえば、義理って言ってたけど、どういうこと？まあ答えたくなかったらいいけどね」

「まあ、いいさ。俺が母さんの連れ子で、雫が父さんの連れ子。それで俺の母さんは10年前に死んで、それから俺の家族に血のつながった人間はいないだけだ」

「なんか…ごめん」

「別にいいさ」

少しの間沈黙が流れるが、それほど居心地の悪いものではない。

「じゃあ、母さんの部屋に荷物運ぶぞ」

「あっ、っつた」

それから昔から変わらない母さんの部屋に荷物を移動する。

自宅にて（後書き）

急遽、妹をヤンデレ妹にしました。

ヤンデレ難しい！

まあ頑張ります。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

学校の地下で

氷華に初めて会った夜から、すでに一週間が経つ。

この一週間で変わったことと言えば、俺が悪魔被いになるのは仕方がないと妥協したことだろう。

それに、この一週間は墮天なんかは出ていない。平和な時間を過ごせた。

氷華が一週間も平和な時間を過ごさせてくれるはずがない。

もう時期、一週間分の何かが来るのだ。

そして、それは登校中に告げられることになる。

「今日の放課後は一緒に教会に寄るわよ」

「拒否権は？」

「ないわ」

「さいですか」

氷華の言うことは絶対。断ったら、引きずってでも連れて行くのが氷華だ。抵抗の意味がないことは、もう理解している。

「でも、何で教会になんか行くんだ？」

「この辺は悪魔の発生が特に多いし、王クラスも何度か確認されるから、大きな教会があるのよ」

そんなこと初めて知ったが、俺って、初心者が上級者モードでゲームやってるもんじゃん。死ねる。

「でも、この辺にデカイ教会なんて無いぞ」

「はあ、あんた馬鹿？あたし達の通ってるの学校って宗教系でしょ？学校の地下にあるのよ。それくらい分かりなさいよ」

「そんなもん分かるかよ」

俺の的確すぎる指摘も氷華には無視されてしまう。

「だから、この地域には悪魔祓いの中でもけっこうな実力者もいるのよ。まあ、学生の悪魔祓いは同じ学校だけだね」

ん？今、おかしい事を聞いた気がする。

同級生の中に同業者がいるかもしれないのか。

何か、知りたいような、知りたくないようなで微妙だな。

「その学校の地下では、何するんだよ」

「主に情報交換、後、パーティーは2〜6人まで組めるから、メンバー探しね」

そういえば、氷華って人数の関係上パーティーに入れなかったって

言つてたが、そんなに入れるなら、普通は入れるだろ。
どっだけ友達いねえんだよ。

「何か失礼なこと考えてない？」

「滅相もございません」

「そう、ならいいわ」

そして、二人で学校に行くのだった。

時は進み、放課後。

「雷斗、行くわよ」

「ちよっ、待てよ」

氷華が俺の手を取り駆けていく。
帰る準備をしている、クラスメート（主に男子）に睨まれながらも
教室を出る。

「それより、地下なんてどうやって行くんだ？」

「部室に決まってるじゃない」

「部室って……なんの？」

氷華がまたしてもため息を吐いてから続ける。

「悪魔祓いが集まる部活、オカルト研究部よ。ちなみにあんたの入部届けも、転校初日に出しといたったから」

「もう、どうでもいいです」

氷華のすることには、全てに関して半分諦めがついてしまった。

「じゃあ、開けるわよ」

言い終わる前に氷華がドアを開けると、目の前に広がる光景に驚く。

「あそこを降りるのね」

氷華は、部室の真ん中にある、いかにも怪しい階段を降りて行く。できれば帰りたい……。

「待てよ」

俺も付いて行き、しばらく降りたら、ドアが現れる。

ガラッ

内開きになってある、身長の上二倍以上あるドアを開けると、中は体育館並みの広い空間になっていた。

「思ってたより広いわね」

氷華も来るのが初めてだったのか、俺と同じ感想だった。

「制服なのは、30人つてとこだな」

大体、1クラスに1人 ぐらいの割合だろう。

他にも、大人が100人近くいる。

1人の制服の女の子が話しかけてける。

「もしかして、新入り？」

「あたしは違うけど、来るのは初めてね。あつ、こいつは新入りよ」

氷華と話してる人は見覚えがある。

いや、覚えがあるってレベルじゃない。

先週、雫が悪口を言っていた相手、俺の隣の席に座ってる人物、そのものだ。

火神灯、それが彼女の名前だ。

赤い髪の手短カットに、健康的なスラリとした体をしている。ちなみに氷華同様に貧乳だが、モデルのようなスタイルなので、逆にそれがいい。

「火神が何でここに？」

「ライト君、そんな小さなことを気にしちゃダメだよ」

むしろ根本的な問題だと思っただがなあ…。

「灯のパートナーは？」

「今日はヴァイオリンの稽古があるらしいから、来れないって」

氷華と火神は席が前後なので、名前で呼び合っぐらいには仲がいいのだ。

「へー、灯のパートナーって誰なの？」

「風切舞って人だよ」

「知らないから、いいやあ」

氷華は転校生だから、知らないかもしれないが、普通は知っている。

金髪の縦ロールで、チヨココロネみたいだが、外国の血が入ってるからか、圧倒的に整った顔をしていて、男女問わず人気のある生徒会長様だ。

「氷華、その人は生徒会長だ」

「ライト君よく知ってるねえ。もしかしてファンだったりするの？」

「違う」

火神の絡み、意外とだるかったんだなあ。

「あつ、氷華。悪魔の情報貰いに来たんでしょ？」

「あつ、うん。そうなの」

氷華にしては、少し齒切れが悪い返事だ。

「灯もさつき聞いた情報なんだけどね、かなり凄腕の2人組の悪魔被いがあるらしいよ」

「それってどんな？」

「1人は水、もう1人は土の属性で、笑いながら戦って、躊躇無く殺してるんだって。現場に遅れて到着した悪魔被いは、怖くて手が出せなかったらしいよ」

また、恐ろしいのが出たもんだ。

まあ敵じゃなくて良かったって心から思う。

「正体は分かってるの？」

「属性から絞られてはいるらしいんだけど、まだ判断はできてないんだって」

氷華は珍しく、怖い顔をする。

「拙いわね」

「悪魔を倒してまわってるんだったら、いい事なんじゃないのか？」

「派手に目立ちすぎなのよ。王クラスが出るかもしれない」

「それって何か拙いのか？」

氷華は本日だけで、何度目か分からないため息を吐いて答える。

「ちゃんと準備をしとかないと、逆に返り討ちに合うの。だから、各地の精鋭を集めて、万全の対策を講じてから望むべきなの」

「そんなもんなのか」

「そんなもんなのよ」

氷華がそう言うなら、そうなのだろう。

「じゃあ、情報も貰ったし、帰りましょ」

「あつ、ああ、そうだな」

「また明日ねえ」

灯が見送るなか、入ってきたのと別の出口から、出て行く。

そこは、学校の近くにある、空き家に繋がっていた。

まあ、大人はこっから入ってきてるってことか。

この時はまだ知らなかったのだ、
凄腕の悪魔袂いの知りたくもない
正体を。

学校の地下で（後書き）

ヒロイン追加ですね。

誤字・脱字・質問は感想欄までよろしくお願いします。
評価、感想、お気に入り登録もよろしくお願いします。

決意

「早く起きなさい」

氷華が文字通り叩き起こしてくる。
いや、まだ叩くの方がましかもしれない。

これは一歩間違えば撲殺ものだぞ。だって、金属バットで殴ってきてるんだから。

「痛いって！俺を殺す気か！」

「あつ、まだ死んでなかったんだ」

「ガチで殺す気だったのか？」

氷華は笑顔だが、目が笑ってない。マジだ。

「冗談よ。それに悪魔との契約者がこの程度じゃ死なないわよ」

たしかに、これぐらいで死んでたら、墮天と戦えるわけもない。

だが、今の問題はそこじゃないと思う。
痛いのは痛い。今はこれが問題だ。

「痛いのは痛いんだぞ」

「起きないのが悪いのよ」

それを言われたら言い返せない。

ん？外がまだ暗いような……。

「氷華、今何時だ？」

「4時よ」

ああ、そりゃ起きてないわ。

てか、そんな時間に俺を起こしてどうしたいんだろう。

「4時に俺に何の用だ？」

「夜中に来ると言ったら、決まってるじゃない。悪魔よ」

やはりか。

いや、氷華に少しでも期待した俺が馬鹿だったんだ。

「何か残念なことでもあったの？」

顔に出たのか、心配そうな目を向けてくる。

心が痛くなるから、そんな目で見ないでほしいんだが。

「それで、悪魔って？」

氷華は思い出したかのような顔をする。

「あっ、そうよ。けっこう強いのが出たらしいから、あたし達も行くわよ」

『も』ってことは、行かなくてもいい気がしてるのは、自分だけでしょうか。

まあ、氷華が言い出したのだから、引きずってでも連れて行かれるから、抵抗はしない。

「場所は？」

「海の上よ」

海の上って、どう行くんだろうか。
教会側から船でも派遣されるのだろうか。

「船でも借りれるのか？」

「あんた馬鹿？悪魔の力を使ってる時は、悪魔の力を使えるのよ。
水の上でも歩けるわよ」

試してないんだから、分からないのは当然だと思うんだが。
まあ、口には出さないが。

「じゃあ、とつとつ行って早く寝ようぜ」

「そうね」

そう言えば、その墮天ってけっこう強くなるまで発見されなかった

んだろうか。

気になったので、氷華に聞いてみる。

「ああ、それはね、悪魔が憑いて墮天になった時には、人の心の隙間に入ってくるもんだから、強烈な悪意を感じるの。それでも、契約者がどこにでもいるわけじゃないから、気付かれない場合がほとんどなの」

「なら、その時に気付かれなかったら、どうするんだ？」

「人を襲った時とか、犯罪を行った時にも、特殊な気配を出すわ。それ以外で気づくことは、不可能に近いわ」

悪魔のことを少しは知った気でいたが、ほとんど知らなかったらしい。

「犯罪って、どんな犯罪なんだ？」

「全部よ。殺人なら憤怒や嫉妬の悪魔、強盗なら強欲、性犯罪なら色欲。他にも犯罪以外でもいろいろあるんだけど、基本的に人間は犯罪を犯そうとしても、最終的には絶対にできないの。だから、犯罪者はみんな墮天」

犯罪者はみんな墮天か。

墮天と戦う理由ができたなあ。

「なら、墮天が世界からいなくなれば、犯罪は無くなるのか？」

「簡単に言つと、そう言つてね」

なら決めた。

「やってやるよ。墮天を、人に害なす悪魔を全て俺が滅ぼしてやる」
母さんの仇は俺が討つ。

「雷斗」

氷華が僅かに笑みを浮かべながら続ける。

「かつこつけちゃってるけど、今のあんたじゃ、無理ね」

「なつ、人がせっかくシリアスな雰囲気出してたつてのに」

「あんたには似合わないわよ」

それに、と続けて

「そんなこと言つんだから、結果で残してもらわないとね」

「やってやるよ。そのうち、氷華も追い抜いてやるからな」

「突き放してやるわよ」

氷華が軽く笑って、一瞬の静寂。

「あつ、早く行かなきゃ」

わざとらしく言う氷華は、話が一段落するのを待っていてくれたのかも知れない。

「そうだな」

そして、近くの港までは、わりとすぐに到着する。

「何だよ、あいつら」

「戦闘経験はあたしより少ないみたいだけど、あのセンスは本物よ」

俺と氷華の視線の先では、大きな大剣をもった黒づくめの墮天と、色は分からないが、髪をサイドポニーにした少女と、髪の長い身長的には小学生高学年の少女が戦っていた。

サイドポニーの少女は蒼い双剣、背の低い少女は2丁拳銃だ。

遠くからなので、顔は見えないが、凄いのだけは分かる。

サイドポニーの少女が双剣で、墮天を翻弄し隙を作る。

隙ができた瞬間に、背の低い双銃の少女が、弾を撃ち込み、墮天を弱らせていく。

「相手は中の上くらいの墮天なのに、双剣の子の動きには余裕があるし、スピードも圧倒的。双銃の子も、あの精密射撃はかなりの腕ね」

氷華がここまで誉めるのだから、相当凄いのだろう。

墮天の動きが完全に鈍った時に、双剣の子が墮天の首を切り落とす。

退避したのを確認して、双銃の子が弾を放ち、その弾が一瞬にして直径2mほどの超小型隕石のような形になり、墮天を潰してしまう。

そこから、光が天に昇ったことから、墮天が死んだのが分かる。

「首を墮とすだけでよかったのに、徹底してるわね」

俺には過剰攻撃のようにしか見えませんけどね。

「雷斗もあれ以上強くないとね」

「努力します」

氷華は納得したような表情をする。

だが、俺もあんな化け物みたいに強くなれるのだろうか。

不安だけが募っていく、16歳の春。

決意（後書き）

なんか、一回だけ学園の日刊で3位とってました！
ありがとうございます。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

銀髪幼女

「あつ、お兄ちゃん」

今は学校。移動教室のため、氷華、灯と一緒に廊下を歩いていたのだが、今会いたくないランキング一位に会ってしまった。

「どうしたんだ雫」

ここは普段通りを装わなくては。

「うん。廊下を歩いてたら、お兄ちゃんの匂いがしたから、来ちゃったあ」

匂いって何ですか？

アレなのか？俺って離れたところにも匂うほど臭かったのですか？

「俺ってそんなに臭いのか？」

「ううん。妹としては、お兄ちゃんの匂いを辿るぐらい初期ステータスに入ってるからね」

怖い。そんな能力があるなら、是非とも放棄してもらいたい。

「じゃあ、これからは辿らないようにな」

「お兄ちゃんが浮気しなかったら、何もしないよ」

浮気したらどうなるのかって、聞いたら負けだよな。
それに浮気って、俺は年齢〓彼女いない歴なんですけどな。

「彼女いないのに、浮気も何もないだろ」

「うん。恋人なんかじゃなくて、婚約者だもん」

いつからそうなったのでしょうか。

もう、いつも同じこと言ってる気がするから、何かもう馴れた。

それに、俺が視線で助け船を求めているのに、氷華と灯がヤンデレ気味な雫に、若干引いてて話しかけてこないし。

「あつ、お兄ちゃん。隣の席の火神さん？とはもう話したら駄目って言ったのに、一緒に移動教室なんて仲いいんだね？」

ああ雫の目が怖い。

今日の放課後は写真屋行って、遺影の写真撮りに行った方がいいかもしれない。

「別に俺が仲がいいわけじゃなくて、氷華が仲いいんだ」

「そ、そうよ」

氷華も続いてフォローしてくれた。

まあ、パートナーだし死なれたら困るとかだろうけど。

「ふーん、そうなんだあ。今回は特別に騙されてあげる。でも、いつも聞いているからね」

ウインクしながら雫は言つてて、動作事態は可愛い。
だが、その左耳に着けてるイヤホンは何を聞いているのですか？

「それより雫。その子は友達か？」

話題転換をはかるために、雫と一緒にいた女の子の話題にすることにした。

それより、この子見た目が小学校6年生ぐらいだぞ。

「あつ、この子はね大沢千佳ちゃん。可愛いからって手出したら駄目だよ？」

出さねえよ。

こんな子に手を出したら、ロリコンで通報されるわ。

「それなら心配ない。俺は犯罪者にはなりたくない」

「おいてめえ、背が少しばかり低いからって、子供扱いするんじゃないよ」

えっ、今の誰が言つたんだ？

もしや、これが七不思議？

「おい、千佳ちゃんが話しかけてやってんだから、跪いて地面でも舐めるのが筋つてもんだろ」

えっ、まさかこの銀髪赤目の人形みたいな、見た目幼女が言ってるのか？

「てめえ千佳ちゃんのこと幼女だとか思ってたねえだろうな!?!」
思ってます。

てか、自分で『ちゃん』付けてる時点で幼女っぽいぞ。

「オモッテナイヨ」

「絶対思ってるじゃねえか!」

もう嫌だ。この幼女口悪すぎる。

「じゃあ何歳なんだ?」

「やっぱり思ってたんだな。千佳ちゃんはまだもう15歳だ」

あつ、12歳とかじゃなかったんだ。

まあ、見た目幼女には変わらないけど。

「意外と大人だったのかよ」

銀髪見た目幼女が今にも怒り出しそうだ。

「あつ、そうだ。そろそろ時間も危ないし、早く行かないと」

「あつ、ああ、そうだな」

グッジョブ氷華。

今回は助かった。

「じゃあね、お兄ちゃん。さっき言ったこと忘れないでね」

雫は笑顔だが、目が笑ってない。

それにさっき言ったことってアレか？いつも聞いてるからって言うアレか？

できれば怖いからやめてほしい。

ブーブーブーブー

雫が離れてすぐにメールを受信する。

『どんまい』

氷華のやつ、他人事だと思いやがって。

俺が思うに、雫が俺に手を出すのは最終手段であって、最初の被害者は氷華や灯だったのに。

メールはめんどくさいので返さず、溜め息だけ吐いた。

そして放課後（＾o＾）ノ

えっ、何故いきなり顔文字なのかって？

テンションを無理矢理にでも上げないと、やってられない時もあるんだよお。

「またここか」

そう、写真屋に行く予定は潰されて、学校の地下にいる。つまり、悪魔祓いの本拠地みたいなもんだが。

「雷斗君の悪魔って何の属性なの？」

「雷」

「名前はなんて言うの？」

「ペケ」

「意外と可愛い名前つけるんだねえ」

「だろ？」

「私好みじゃないけどね」

もう嫌だ。

灯って教室じゃ、けっこう性格いいと思ってたけど、実際はけっこうひねくれてましたよ。

もう、さっきから話してる感じだとアレです。右に行こうと言えば、左に行くタイプですよ。

そう、根っからの天邪鬼。

それが灯の正体だったのだ。

「で、何で灯も付いてきてるんだ？」

「舞さん待ってるんだけど、舞さんは色々忙しいから。ほら、舞さんって風切舞って名前で風切学院の生徒だよ？」

えーっと、アレですか？

理事長の娘さんまたはお孫さんなんでしょうか。

「理事長の関係者？」

「そついう噂だよお」

理事長の顔知らないけど、めっちゃ気になる。

「それに、生徒会長だしね」

「あの、縦ロール美人が理事長の血縁者だったとはな」

ふむふむ、やっぱり縦ロールは金持ちの証だったのか。

「雷斗って生徒会長みたいなのがタイプなんだあ。あたしは会ったことないけど」

「雷斗君、紹介するよ。たぶん、相手にもされないと思うけど」

氷華は冷たい絶対零度の視線で、灯は面白いものでも見つけた子供みたいな目を向けてくる。

てか灯、自分でも相手にされないのは分かっているから、いちいち確認する必要はない。

「でも俺さあ、あの生徒会長ってどっかで見ただことがあるんだよな
あ」

「ふーん。携帯の待ち受けにして毎日見てるからじゃないの？」

「おい灯、お前は俺をどんな奴だと思ってるんだ？」

灯は少し考えるような仕草をして、思いついたことを言う。

「好きな子の顔をずっと見てたくなって待ち受けにしちゃうぐらい
の変態。ちなみに今は舞さん」

「ちげえよ。どうやったら、そんな結論に結びつくんだよ」

「あつ、今は銀髪幼女だったね。ごめんごめん」

相手にするだけ疲れそうなので無視しとこう。

「ごめん雷斗君、冗談だから」

「今回は許してやるよ」

灯は無視されるのが駄目みたいだ。

これはこれでめんどくさそうな。

「灯さん、遅くなってすいません」

金髪縦ロールで人形みたいな生徒会長が現れた。

ん？ やっぱり見たことがある。

「あのお会長？」

「どなたか存じませんが、どうしましたか？」

「あつ、俺は灯の友達の高橋雷斗ですけど」

一瞬の間に大きく息を吸い込む。

「隣のマ ドでバイトしてませんでしたか？」

会長さんが明らかに固まっている。

だって、お嬢様が クドで、バイトなんてしてると思わないだろうから。

「少し、お二人でお話しませんか？」

顔色から伺うに、相当焦っている。

まあ、なるようになるか。

銀髪幼女（後書き）

今回は銀髪幼女こと千佳の初登場です。

次回は偽お嬢様生徒会長の舞ですね。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7417z/>

雷氷の悪魔祓い

2012年1月4日10時49分発行